地域の情報をお届け！

呉トピックス

倉橋町産「お宝きゅうり」出荷

㈱菜ずき人

7月中旬、呉市倉橋町で夏秋キュウリ「お宝きゅうり」の出荷が始まっています。生産するのは㈱菜ずき人。6月中旬にビニールハウス15aで約1，200本の苗を植え付け、多い日には1日約400kgを出荷します。

同法人は2019年からキュウリの周年栽培に取り組み、延べ約60aのビニールハウスで春、夏、秋と隙間なく出荷。

選果効率の向上と品質安定化のため2024年に自動選果機を導入。長さや曲がりを映像で判別してS～2Lの等級ごとに仕分けます。いままで、選果は熟練した作業員があたっていましたが、導入したことで人を選ばず、安定した選果ができ、また、作業時間もコンテナ1箱で4～5分と大幅に短縮できています。

代表取締役の水場一彦さん(45)と大須賀大さん(48)は「仕立てや栽培管理、選果など新たな技術を導入して、より良いものを育てる。多くの消費者に倉橋産キュウリを届けたい」と意気込みます。

夏作の「お宝きゅうり」は10月頃まで約10tの出荷を見込みます。

▲大きく育ったキュウリを収穫する大須賀さん

盆用菊　出荷ピーク

㈲山本農園

7月下旬、江田島市沖美町三高地区で菊を栽培する㈲山本農園では、盆需要に向けて収穫、出荷が最盛期を迎えました。ピーク時には1日2万本を超え、盆用では約12万本の出荷を見込みます。

代々取り貯めてきた栽培データを活用して出荷時期から開花、定植時期を逆算して苗を育て、輪菊は花芽の成長を遅らせて開花時期を調整する電照菊も栽培しています。

今年は病気などの発生はなく、例年より遅い梅雨入りと梅雨明けの好天で昨年より3～4日ほど早く生育する中、収穫に追われる山本満彦さん(39)は「天候に左右されるため管理が大変。丹精込めた菊をお盆用の仏花だけでなく、日用でも楽しんでほしい」と汗を流します。

高品質な花の安定供給に努める同農園は、小菊や輪菊など約60品種を4haの圃場で栽培し、年間130万本の出荷を計画しています。

▲収穫時期を見極める山本さん

地元高校生が就業体験

呉商業高校2年生

JAひろしま呉地域は、地域貢献活動の一環として、毎年インターンシップを実施しています。今年度は7月31日から3日間、呉商業高等学校の2年生2人を受け入れ、呉グリーンセンターと信用共済課、総務管理課や呉支店で就業体験を行ないました。

初日は事業説明の後、呉グリーンセンターで産直市用の花卉の準備や荷造り、2日目からは信用共済課で事務処理、呉支店で札勘なども体験しました。

体験した川崎結梛さん(16)と山本愛依那さん(16)は、「初めての経験。JAのいろいろな事業について体験させてもらい、大変有意義な時間だった。今後の学業や就職活動に活かしたい」と笑顔で話しました。

▲菊の品出し準備に汗を流す川崎さん（左）と山本さん

PB「こだわりいしじ」生育調査すすむ

JAひろしま蒲刈アグリセンターは8月1日、呉市蒲刈町・下蒲刈町の「こだわりいしじ」に取り組む園地29カ所で生育調査を行ないました。

「こだわりいしじ」は管内呉市倉橋町が発祥の「いしじ温州みかん」をこだわり品として商品化した、くれ選果場のプライベートブランド。出荷部会へ加入が必須条件で、加入後に園地登録を行ない、梅雨明け前後に全面シートマルチ施用します。収穫時には糖度12度以上に仕上げ、専用の5kg箱に詰めて出荷します。

生育調査は園地の標準的な樹を決めて果実の直径と糖度を計測。肥大状況や糖度の上昇度合いを数値化し、マニュアルに沿って園地に応じた管理方法を部会員に周知。あわせて、病害虫の発生状況も調査し、早期防除を励行しています。調査は9月末まで行ない、11月の樹別果汁分析調査での合格率向上を目指します。

JA広果連の小川哲也技師は「マルチ栽培でのいしじ温州は後期肥大が鈍化する傾向にあるため、数字に基づいた摘果管理を徹底する必要がある。目標階級・糖度に仕上げられるよう、きめ細かく指導していく」と話しました。

▲ノギスで果径を計る小川技師ら

なるほど え～のう！ 営農情報

落葉果樹

イチジク

▽礼肥の施用

樹勢の回復と貯蔵養分を蓄積させる目的に施用します。

施用するタイミングは収穫が7～8割終了した時点となります。

ただし、樹勢の強い若木などは控えめに施用します。

▽病害虫防除

園内に腐敗した果実を放置していると、それが病害虫の感染源となります。可能な限り腐敗果などは園外に持ち出して処分することを心がけましょう。

▽台風対策

葉の大きいイチジクは他の果樹に比べ台風被害を受けやすく、強風により、倒木や枝折れ、そして果実は風スレなどによる傷果ができやすくなります。

対策としては、支柱などで樹を固定し補強することです。

日頃から風の当たりやすい園地で栽培している場合は、防風網を設置するなどの対策が必要です。

カキ

▽汚染果対策

果実が成熟するに従い、皮の一部が黒変するものを「汚染果」といいます。

特に西条柿や太秋で多く発生します。

主な原因は、園内の通気性や日焼け、風スレ、秋の多雨などです。

日頃から園内の除草を徹底し、枝が過繁茂とならないよう通気性を良くし、果実が乾きやすい環境を作りましょう。

モモ

▽礼肥と土壌改良

8月下旬から9月中旬に肥料を施用しましょう。

また、秋根が発生する前の9月から10月にスコップなどで断根し、完熟たい肥（こだわり健肥など）や土壌改良剤の施用を行ないましょう。

▽秋季せん定

この時期のせん定の目的は、

①樹勢を落ち着かせる。

②骨格の形成。

③葉芽や枝の充実。

となります。

樹冠内部から徒長している枝やかぶさり枝、勢いの強い枝などを取り除きましょう。

除く程度は、冬のせん定量の約2割程度までにとどめます。

枝の伸長の心配がなくなる9月から実施しましょう。

キウイフルーツ

▽棚面管理

棚面が暗くなると糖度が低くなり、貯蔵性が低下するため、明るさを保つように心掛けましょう。

明るさの程度は、棚下へ木漏れ日がさす程度です。

▽潅水

乾燥が続く場合は、葉が傷み落葉することがあります。

引き続き、適度な土壌水分を保ちましょう。

ブドウ

▽枝管理

収穫後、果実がなくなり、枝が再発生しやすくなります。貯蔵養分の浪費を防ぎ、結果母枝の充実をはかるために副梢（春に発生した枝の先端や脇から発生した枝）の摘芯やかぎ取りを行ない、枝の伸長を抑制しましょう。

また、縮伐予定の樹は、貯蔵養分を溜めこむ前に切り縮めましょう。

MEMO

落葉果樹は秋になると、葉で作った養分を枝や根に貯蔵し、冬支度の準備に入り始めます。

効率よく貯蔵を促すためにも、適度な葉数の調整や肥料の施用、潅水などが重要となります。

作業が遅れないように気を付けましょう。

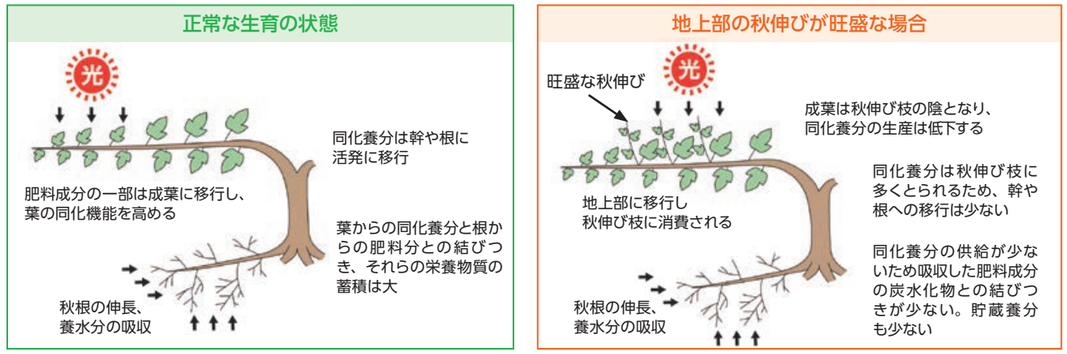

図　果樹における秋根の働きと貯蔵養分蓄積との関係（模式図、岡本）―「農業技術体系」より―

家庭菜園

○9月に植えるおすすめの野菜

ジャガイモ

〈植え付け〉

ジャガイモは、ナスやトマトと同じナス科に属し、連作すると土壌潜伏菌により病気が発生しやすくなることから、なるべくナス科（トマト・ナス・ピーマン等）が3年以上栽培されていない場所を選びましょう。また、ジャガイモは弱酸性土壌（pH5・0～6・0）を好み、アルカリ性土壌では芋の表皮がざらざらになる「そうか病」の発生が助長されます。作付け毎にほとんどの野菜では石灰を施してpH調整を行ないますが、ジャガイモ植え付け前の土づくりでは石灰資材の量に気を付けて植え付け準備を行ないましょう。

秋作は植え付け時まだ暑いため、種イモが腐りやすく、病気の発生する可能性があります。近年温暖化が進み9月初旬も猛暑日が続いているため、気候が落ち着く9月中下旬頃に植え付けていきましょう。

品種ごとに微妙に変わりますが、株間25㎝～30㎝で深さは15㎝が基本です。

〈種イモの準備〉

春ジャガイモ栽培では、種イモが大きい場合に切って植え付けますが、秋ジャガイモは種イモを極力切らないようにしましょう。秋ジャガイモの植え付け時期は、まだ気温が高いため、切って植え付けると、種イモの断面から傷みやすくなってしまいます。もし、種イモが大きく、切断して使用する場合は50g以上で各片に芽がつくように頂部を中心に切断し、風通しのよい場所で切り口を十分に乾燥させてから植え付けましょう。また、切り口に「じゃがいもシリカ」をつけると腐敗防止になります。

植え付ける2～3週間前に種イモを涼しく風通しの良い日陰などに置いて、芽だしを行ないましょう。

〈水やり〉

ジャガイモは乾燥に強く、あまり多くの水分を欲しがりません。種イモの中には、すでに水分が含まれているため、植え付け後も水やりをしなくても、自然に任せるだけで芽が出てきます。

ダイコン

〈植え付け〉

まっすぐなダイコンをつくるには、十分な深さに耕された土（深さ30～50㎝）と肥沃で排水性、保水性が両立できる地力のある土づくりが必要です。

堆肥（2㎏／㎡）・石灰資材（苦土石灰で100～150g／㎡）を播種2週間前に、肥料は1週間前には施用し、しっかりと混ぜておきましょう。この時、雑草や前作の残渣、石などはすべて取り除きます。

元肥とする肥料分の目安は1㎡あたり窒素分10～20g（8－8－8で120～250g）です。種まきは、1つの穴（ビールびんなどの底を押しつけて深さ1・5㎝ほどにした穴）に5～6粒をバラ撒きし、1㎝程度の土をかけ軽く押さえます。発芽するまでは、土が乾燥しないように水やりをしましょう。株間は25～30㎝、畝幅60～70㎝が良いでしょう。

〈間引きと追肥〉

適期に撒けば2～3日で発芽します。1回目の間引きは子葉が完全に開いた時、形のよいものを残して3本立ちにし、2回目は本葉2～3枚の時に生育が中くらいのものを残して2本立ちにします。3回目は本葉6～7枚の時、元気のよいものを残して1本立ちにします。

追肥は、2回目と3回目の間引きの後に1㎡あたり50g（8－8－8）をばらまきし、土と混ぜながら株元を土寄せしましょう。

○9月の野菜栽培の注意点

①害虫対策をする

9月は害虫の被害が減ってきますが、まだまだ活動する時期です。特にアブラムシは他の病気の感染源にもなるため早めの防除を行ないましょう。また、アブラナ科の野菜を育てる場合は、オオタバコガやヨトウムシなど大型チョウ目害虫の被害を受けやすいため、防虫ネットをかけるなどの対策をしましょう。

植え付け時に土壌に混和する農薬（オルトラン粒剤、ダントツ粒剤、ダイアジノン粒剤など）を使用するなど早めの防除を心がけましょう。

②台風対策をする

9～10月ごろは、秋雨前線による長雨や台風が発生することが予測されます。雨が長く降り続くと、土中が常に湿って病気の発生や、害虫被害も多くなります。また、暴風被害によって茎が折れてしまったり、飛ばされてしまう事もありますので天気予報をチェックして、事前に大雨と強風の対策を立て、予防しましょう。

○溝切り

大雨が予想される場合は、排水溝を整備して通路の端を溝切りして排水を心掛けましょう。

○べた掛け・トンネルがけ・土寄せ

種まき直後や育苗中の苗、草丈の低い作物は、不織布で「べた掛け」をしたり、寒冷紗やビニールで「トンネルがけ」をして野菜が倒れたり、吹き飛ばされないように裾をしっかりと埋め込み管理をしましょう。また、ネギ類など草姿の細い野菜は「土寄せ」を行なって揺れを減らしましょう。

○果菜類の支柱の補強・固定

支柱は強風にあおられても倒れない太さのものを選び、誘引ひもが緩んでないか、結束が不十分なところがないかを確認しておきましょう。また単独で支柱を立てるのではなく、隣の株の支柱と横向きにして支柱どうしをつなげると更に強度が増して倒れにくくなります。

ときめき女性部通信

ＪＡ女性部がＪＡ職員と対話集会 支店ふれあい係も参加

▲活発に意見を交換する女性部員とＪＡ職員

ＪＡひろしま女性部呉地区本部は７月29日、同ＪＡ音戸支店でＪＡ職員との対話集会を開催しました。女性の意見をＪＡ事業や組織活動の活性化につなげようと、女性部の支部長ら11人とＪＡの地域統括長や基幹支店長、支店ふれあい係の職員ら15人が出席しました。

ＪＡ事業概況や女性部活動を報告、今後のＪＡ運営や組織活動、女性部活動、食と農などについて活発に意見を交換した後、ＪＡ職員らと一緒に『家の光』８月号の「疲れない体操」でストレッチ。また、７月号付録を使ったブルーベリーのデザートを用意しました。

同女性部の前田ミツヱ部長は「部員が力を合わせ、女性部の活動の意味や魅力を伝え、組織を活性化させたい。ＪＡ・地域と一緒に出来ることからひとつずつ進めていきたい」と話しました。

▲ＪＡ職員と一緒にストレッチする女性部員

みんなでいきいき100歳体操 広支部 広北グループ

ＪＡひろしま女性部呉地区本部広支部広北グループは、毎週水曜日にＪＡ広北店で「いきいき100歳体操」を行なっています。部員10人が集まり30～40分、映像に合わせてゆっくりと身体を動かします。

「地域活性化は女性部の活性化から」の思いで部員に声をかけてスタート。７月に丸１年となった取り組みは、行政や医療機関と協力して開催しています。

前田ミツヱ支部長は「体操をきっかけに部員増員に繋げたい。みんなでいきいきと健康に活動をつづける」と笑顔で話します。

▲ゆっくり、じっくりと体を動かす部員